

# 東海の古代

## 第274号 2023年6月

会長 : 畑田寿一  
編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : toukaikodai@yahoo.co.jp  
HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

### 蛇行剣の世界

一宮市 畑田 寿一

蛇行剣は蛇のようにうねった剣で、全国では70か所以上で出土しており、今年初めには奈良県の富雄丸山古墳から盾形の銅鏡と併せて出土して話題となった。愛知県では豊川市の花の木古墳からも出土している。蛇行剣が謎とされている理由は現在のヤマト主導型歴史観では説明できない点にあり、地方を跨る複数の勢力の存在を示唆している。

今回は、今まで分かった事柄を整理して、どの様な勢力の存在が考えられるかを見てみたい。



(富雄丸山古墳蛇行剣：榎原考古学研究所)

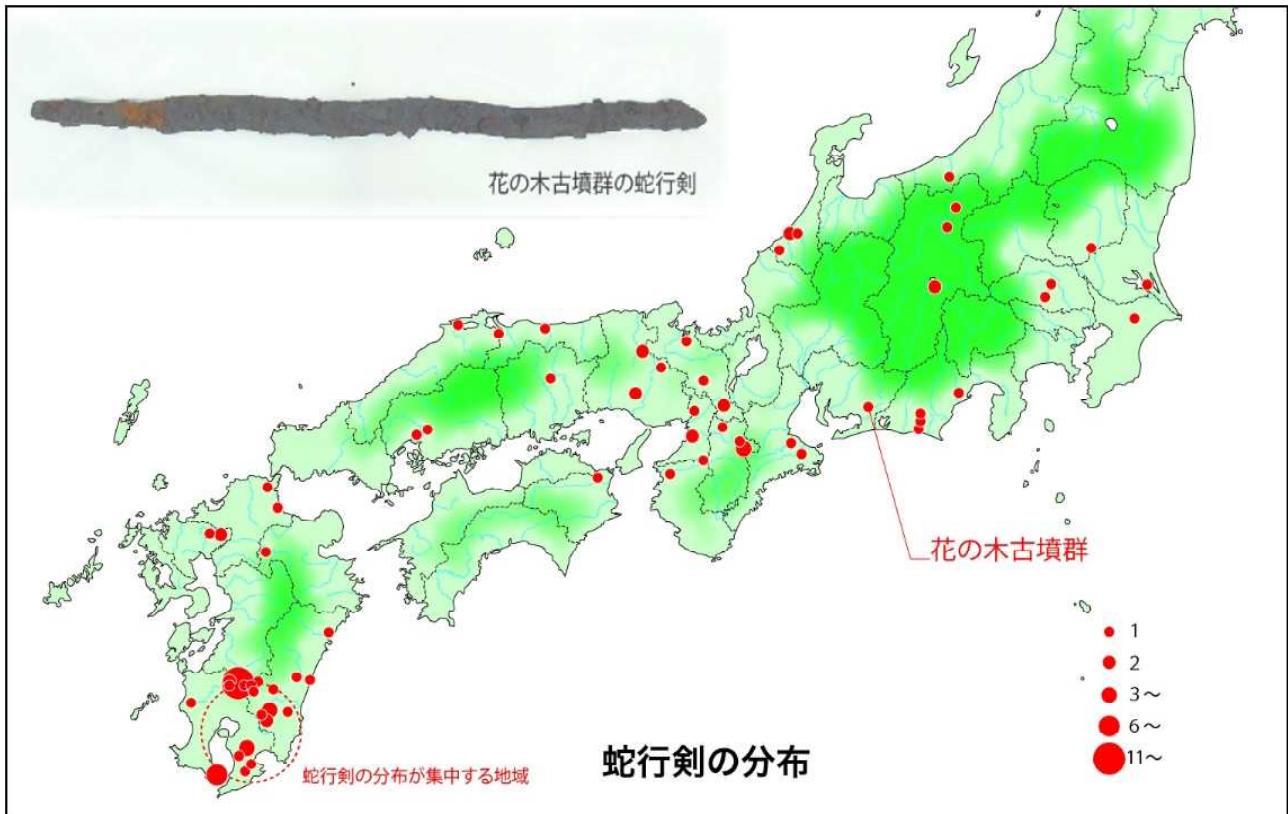
#### 1 現在までに分かっている事柄

##### (1) 南九州での事例

少し資料が古いが「鹿児島県立博物館研究報告第7号」(1988年)で諏訪昭千代氏は次のように述べている。(文責：筆者)

- ① 南九州での蛇行剣の出土は日向国、大隅国、薩摩国にみられる。
- ② 出土数は日向国が最も多く、薩摩の国が次に続く。
- ③ 墳墓の形式は地方により地下式横穴墓や地下式積石室墓と異なるが、被葬者の近くに鉄鏃と共に副葬されている。
- ④ 墓には免田式土器が含まれることもあり、原点が弥生時代まで遡る可能性を秘めている。

しかし、男狭穂塚古墳(宮崎県西都市：5世紀前半)の墓形は帆立貝形古墳であり、鉄鏃などは出土するが蛇行剣は出土していない。蛇行剣を有する氏族は別系列の氏族であった。



(蛇行剣の分布：愛知県埋蔵文化センター)

## (2) 花の木古墳の事例

富雄丸山古墳については多くが報道されているので、比較的報道の機会が少ない豊川市の花の木古墳について述べる。

花の木古墳群は4世紀～5世紀前半に造られた古墳群で、蛇行剣が埋葬されていたのは7号遺跡（13m程度の方墳：5世紀前半）であった。この遺跡には2名が埋葬され、いずれも鉄器類や勾玉などが副葬されており、北側の埋葬者から蛇行剣が出土した。蛇行剣は足元に置かれ、他の剣と共に埋葬者の霊を守る意味があったと思われる。場所は豊川の西側の丘陵地で、東海道と飯田方面に抜ける街道の交差点にあたる。この地域は縄文時代の遺跡や銅鐸が出土し、早くから文化の集積地であった。

同様の遺跡に袋井市の五ヶ山古墳群がある。当地は弥生時代から栄え、多くの遺跡が集積しているが、その内の石ノ形古墳（30m程度の方墳：5世紀後半）からは鎧兜とともに蛇行剣が出土している。

いずれもヤマトより九州中央部の影響が感じられ、九州から関東北部に抜けるルートの一部であると推測される。

## (3) 横穴式石室の分布

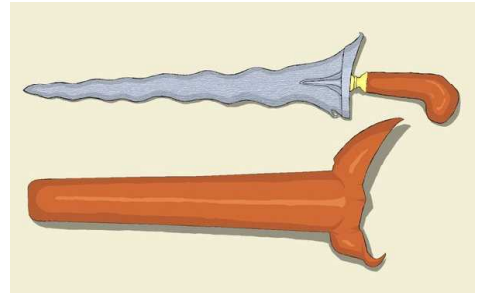
横穴式石室は通説では次の様に九州から東国に広まったと考えられている。

時 期	地 域
4 世紀後半	福岡市老司古墳、湊崎古墳
5 世紀前半	福岡市丸隈山古墳、唐津市横田下古墳
5 世紀中頃	八女郡石人山古墳、熊本、宮崎、鹿児島など
5 世紀後半	岡山、大阪、紀州、三重（おじよか古墳）、愛知西尾市

この流れは中国から高句麗を経て九州北部に伝わったと考えられているが、蛇行剣の場合南九州を出発点としており少し流れが違う。九州上陸後、2つの文化が一緒になって広まったと考える必要がある。

## 2 蛇行剣の海外での事例

刀身が波打つ剣は殺傷能力に優れ、インドネシアのクリス短剣が有名である。明治時代の考古学者の鳥居龍蔵は蛇行剣と東南アジアとの関係を示唆したが、時代が違うため現在は否定されている。しかし、蛇行剣に占術的要素が強いことから、筆者は風水の盛んな長江付近の文化の影響を受けていると推測している。



(クリス剣：ピクシブ百科事典)

## 3 ヤマト主導型歴史観に突きつけるもの

ヤマト主導型歴史観では、「卑弥呼の時代から日本列島はヤマト主導で勢力の拡大が進み、5世紀の雄略天皇期には日本全土を支配するようになった。」としている。勢力拡大の象徴は前方後円墳であり、各種の威信財であった。しかし、蛇行剣は九州を起点としてヤマトを通り抜け東国へと広がり、次のような特徴がある。

### (1) 起源は南九州で関東、新潟付近まで分布している。

蛇行剣は時期的にみても南九州が発祥地である。この地は隼人の支配地であったと考えられることから蛇行剣の文化と隼人を結びつける説も存在するが、スケールの大きさから隼人主導説は考え難い。この事例からは雄略天皇期にヤマトが日本全土を支配していたとは言えないことになる。

### (2) 富雄丸山古墳は円墳であるが、出土品がユニークで豪華である。

ヤマトのお膝元の生駒山麓において前方後円墳体制から言えば円墳しか許されない格下の豪族が豪華な調度品を埋葬し、ヤマトに無い風俗習慣を持っている。しかもヤマト朝廷は3面の三角縁神獣鏡を送り、この豪族を厚遇している。

### (3) 横穴式石室との関連が深いが、少し流れが違う。

九州中・南部を起源とする風習には装飾古墳や横穴式石室などがあり、いずれも太平洋沿岸を中心に日本全土に広がっている。これらの広がりは多様であり、ヤマトの勢力とは別な勢力の存在を示している。

## 4 まとめ

日本列島には大きく分けて、日本海に沿った文化の流れと太平洋沿いの流れがあったと考えられる。双方はそれ程厳密に区分されていなくて、氏族ごとに入り交じっていた。蛇行剣などは、南九州から肥前、豊前を経て瀬戸内海に入り、難波から紀伊半島を廻り込んで穂の国（豊川）に上陸後、東海道を東に進み、東京湾から常陸国まで通ずるルートに乗っていた。このルートの特徴はヤマトには入らず独立した文化圏を呈していた点にある。今回述べた蛇行剣の他に、装飾古墳、崖に穴をあける横穴式墳墓などが同じ道を辿ったと考えられる。



「歴史地震学会25号」（2010年）で、桜井貴子氏は「**中国大陸では4世紀から寒冷期に入ったが、日本は5世紀まで湿潤期であった。**」とされている。この結果、中国の民の移動が起り、長江付近の民が日本に流れ込む結果となったのではないかとされている。鹿児島県串間市の王之山古墳から出土したとされている穀壁や銭亀塚古墳の雁木玉などは通説では市場からの購入品とされているが、人の移動に伴い、朝鮮半島を経由せず長江流域からもたらされた可能性が高い。「倭人は呉の末裔」とする説は否定されているが、長江付近からの流入は可能性として存在する。九州南部の歴史を再度見つめ直す必要があるのではないかとされている。

# 四天王寺と難波津、及び前期難波宮

東海市 大島 秀雄

## 1 はじめに

5世紀に難波地域の開発が始まり、上町台地やその周辺にはさまざまな施設や倉庫群、手工業の工房などがおかれ、都市的な様相をもちつつ難波遷都へとつながっていくと考えられており、難波津はこうした難波地域の繁栄を外交や流通の拠点として支えたものと思われ、四天王寺も地域の信仰を集めたものと想像されます。

本稿では加藤謙吉氏の『日本古代の豪族と渡来人』（雄山閣、2018年）や佐藤隆氏の「古代難波地域における開発の諸様相－難波津および難波京の再検討－」（『大阪歴史博物館研究紀要 第17号』2019年に所収）、栄原永遠男氏の「難波屯倉と古代王権－難波長柄豊碕宮の前夜－」（『大阪歴史博物館研究紀要 第15号』2017年に所収）などを参考にしてその歴史を概観してみたいと思います。

## 2 四天王寺の創建の経緯と創建者

四天王寺は7世紀に創建されて以来、現在に至るまで法灯を伝えるわが国を代表する古代寺院です。8世紀の後期難波京における整備の中心となった地域のひとつである四天王寺周辺には、四天王寺の軒丸瓦のひとつが堂ヶ芝廃寺（撰津百濟寺）の創建瓦や、舒明天皇の命によって造営された飛鳥の吉備池廃寺（百濟大寺）と同範であることなどから、四天王寺や堂ヶ芝廃寺の造営が斉明天皇の菩提を弔い、国の守護と百濟復興を願ったものとの意見があります。

また、『日本書紀』の崇峻即位前紀の四天王寺創立の縁起譚は後世の造作にもとづく虚構であり、推古天皇元年条の難波の荒陵に四天王寺（の前身のお寺）を造り始めたとの記事がもっともらしく、丁未の役（守屋合戦）とは無関係であり、厩戸王の発願とするのは無理があるとされています。加藤氏によれば、推古天皇三十一条に新羅使らが献上した舍利、金塔らを葛野の蜂岡寺や四天王寺に納めたとする記事は、新羅王がヤマト王権の圧力により友好関係の証として仏像や仏具を贈呈し、厩戸王の追善という名のもとに葛野の広隆寺や四天王寺に納入されたにすぎないとしており、結局、四天王寺と広隆寺は同じ頃、同じような経緯で創建されたと理解されています。

そして、四天王寺の発掘調査結果より、塔、金堂、中門、南大門などは飛鳥時代に造営されたが、回廊と講堂が実際に建造されたのは7世紀後半の白鳳時代であるとされます。

要するに、四天王寺の造営は推古三十年頃に開始され、7世紀半ばになっても未完の状態にあり、乙巳の変後の難波遷都を契機に、これまでとは異なる形で造営が継続されたと加藤氏は推測しているわけです。

また、荒陵寺が四天王寺という寺号に変更されるのは、小四天王像や大四天王像が安置された孝徳朝から天智朝にかけての頃とされ、鎮護国家的な思想のもと、東アジア諸国と直接相対峙する国際港難波津所在の寺院に四天王像が安置され、国の守りとされた蓋然性は高いとしており、卓見ではないでしょうか。

従って、大化期以降の四天王寺は私寺ではなく官寺的要素の強い寺院と位置づけることができるが、それ以前はどうだったのでしょうか。

田村圓澄氏は難波吉士氏が本拠の難波に氏寺（荒陵寺）を持った可能性が大きいとし、厩戸王の追善をかねて氏寺の造営を始めたのだとしています。

6世紀後半に吉士系諸氏を結集してつくられた難波吉士の氏族組織は伽耶系の渡来人より成り、紀臣・坂本臣・大伴連など対朝鮮外交や軍事行動に従事したヤマト王権の有力豪族のもとに所属し渉外実務を担当したが、伽耶諸国滅亡後の6世紀後半にその主要な勢力

は王権の手によって難波吉士という擬制的な同族団に編成されたものと考えられています。

### 3 難波津

1987年から始まった旧大阪府中央体育館敷地における発掘調査で見つかった16棟からなる5世紀代の法円坂倉庫群は設計・施工においてそれまで我が国にはない革新的な技術が用いられ、規模も当時の頂点に位置づけられ、難波屯倉を構成するものとみられています。

難波津は難波屯倉や難波館などの名前が史料に見られる6世紀代には既に外国の使節を迎える港として機能しており、松尾信裕氏は古代の難波津が東横堀川北端部の東西に広がる低地部分に埋没している旧大川岸にあったと推定しています。

異論はあるものの、物流の拠点である法円坂倉庫群の近くに難波津があったとするのは妥当な結論ではないでしょうか。

### 4 前期難波宮（難波長柄豊碕宮）

前期難波宮が完成したのは652年で、孝徳即位の7年後であり、それまで孝徳天皇と新政府メンバーは大郡宮（元は外交用施設）や小郡宮（元は内政用施設）などに住んで難波長柄豊碕宮のプランを実地に検討していたのであろうと考えられています。

それらの前身は難波屯倉で、諸施設の機能、設備は充実しつつ分化し、大郡、小郡、難波館などと称されるようになり、難波屯倉から分立したとされます。

難波屯倉の成立は6世紀前半とされ、難波長柄豊碕宮前夜の段階の難波屯倉は、上町台地先端部やその周辺地域の統治の機能、倉庫の収納および管理機能を中心に存続していたと考えられます。

また一部には前期難波宮は孝徳天皇の宮ではないとの意見もあるようですが、次のような孝徳朝の立評（建郡）記事があることから、そのような考えは否定されそうです。

#### (1) 常陸国風土記・行方郡建郡記事

古老曰、難波長柄豊前大宮馭宇天皇之世、癸丑年（653年）、茨城国造、小乙下壬生連麿・那珂国造、大建壬生直夫子等、請<sub>レ</sub>惣領高向大夫中臣幡織田大夫等<sub>一</sub>、割<sub>レ</sub>茨城地八里那珂地七里合七百余戸<sub>一</sub>、別置<sub>レ</sub>郡家<sub>一</sub>。

#### (2) 因幡国伊福部臣氏古志（系図）

第二十六 大乙上都牟自臣  
是大乙上都牟自臣難波長柄豊前宮御宇天萬豊日天皇二年丙午（646年）、立水依評任<sub>レ</sub>督授<sub>レ</sub>小智冠<sub>一</sub>。

加えて、『続日本紀』和銅元年八月八日条によれば、高向国忍（皇極紀では高向臣国押と称す）は難波朝廷の刑部尚書で、大花上の位（大宝令の正四位に相当）であったと記されているので、前期難波宮の孝徳を支える重臣だったのでしょう。

### 5 第三次遣唐使の派遣

『日本書紀』白雉五年（654年）二月条では4項の高向国忍と同族の高向史玄理らが唐に派遣された時に唐側から日本国の地理や国の初めの神名などを聞かれ、その問いに対して全て答えたとされます。

『新唐書』日本伝の記事には、天御中主～神武～応神～海（敏）達～用明（阿脱？）目多利思比孤）～皇極までの天皇名などが記されている部分があるため、この初期段階の情報が上記の書紀に書かれている問いに対する答えの一部であったことが分かります。

この問答の背景として考えられることは、以前に倭国側が国号を日本に変更することを伝えたが、唐側は国号を変更するということが王朝が変わったことを意味すると理解してその証拠の提示を求められたが、王朝が変化していないことを上手に答えられなかったの

で宿題になっていたということでしょう。

孝徳天皇が史（ふひと）のカバネを有する唐の制度に精通した政治顧問の国博士である高向史玄理を唐に派遣したということは、倭国に対する理解を深めて貫うための強い意志を込めた人選だったと思われます。

なお、高向（漢人）玄理は608年に小野妹子に同行して隋に渡った経験があります。

## 6 おわりに

応神天皇の大隅宮や仁徳天皇の高津宮が上町台地にあったとされるので、その延長として雄略天皇の時代から難波津は本格的に運用されたものと思われますが、それと前後して難波地域の開発が始まり難波遷都へとつながっていったものと推察されます。

『日本書紀』推古三十二年条には寺の数が46、僧が816人、尼が569人とあり、寺の多くが河内にあり、これらの全てが飛鳥寺を頂点とするヒエラルキーの中に位置付けられ、相当な経済基盤が河内には存在していたこと、また全国に国造が任命され、各地に屯倉が設置されているというような社会状況下から一歩前進して列島の王権の権力集中を目指したのが孝徳朝の大化改新であったのでしょう。

なお、四天王寺や前期難波宮のような大型建造物は一朝一夕には築けないものであり、その前身を含めて完成までに長い年月を要したのは確実です。

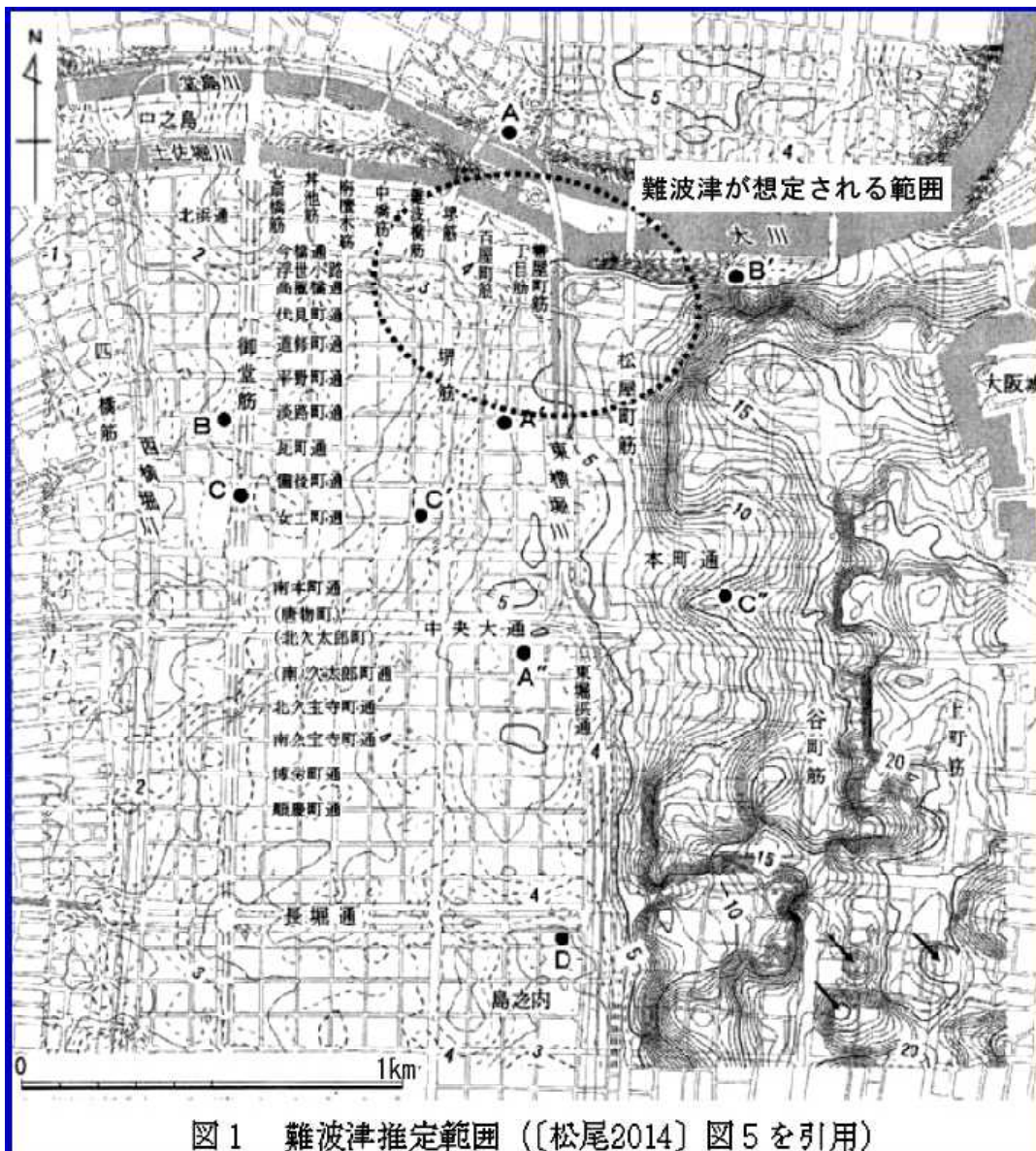


図1 難波津推定範囲（〔松尾2014〕図5を引用）

『大阪歴史博物館研究紀要 第17号』より転載

## 神武東行の出発地

名古屋市 石田 泉城

ニニギの正式名称は、『古事記』では「天邇岐志 国邇岐志 天津日高日子 番能邇邇藝命」(あまにきし くになきし あまつひこひこ ほのになぎのみこと)と記されます。

『日本書紀』第九段第八の一書では、多少文字が異なるものの「天饒石国饒石天津彦火瓊瓊杵尊」(あまにぎし くになぎし あまつひこ ほのになぎのみこと)とされます。

『古事記』を例にしてニニギの名について私の解釈を示せば、「邇」は一文字で「近い」と言う意味の漢字ですので、ニニギは、「天に近い岐志、国に近い岐志の、天の子で、穂のニニギの命」という名です。要するにニニギは、天から国に至るその中間の「岐志」に上陸し足がかりとした、天の子であって、穂のニニギの命と称します。

ここで言う「天」とは対馬海峡の島々であり、その中心地は「壱岐」ですから、壱岐には天照大神が住む高天原(たか・あまがはら)があり、「天ヶ原」(あまがはら)、「高野原」(たかんばる)の地名が壱岐に現存します。

また、「岐志」は、糸島半島の西端にあり、この特異な地名があるのは日本全国で糸島市志摩岐志(旧志摩郡岐志村)のみです。岐志の名称が付される岐志漁港があります。

ニニギは、天照大神の孫で、壱岐(天比登都柱)を出発してから糸島の姫島(天一根)を經由して、糸島半島の「岐志」に上陸し、ここを拠点として糸島平野を征服し、糸島平野と福岡平野の中間に位置する日向(ひなた)に宮を構えたと考えています。この日向には高祖山連峰の最高峰である「クシフル山」があります。

『古事記』で言うところの天孫降臨地である「筑紫日向之高千穂之久士布流多氣」(ちくしひなた たかちほのくしふるたけ)であり、『日本書紀』一書の「筑紫日向高千穂櫛觸之峯」(ちくしひなた たかちほ くしふるのみね)にあたると思います。

さて、そこで神武東行の出発地の問題です。

古田武彦の古代史学である「古田史学」の中では、2説あります。

一つは、通説と同じく宮崎県日向(ひゅうが)国を神武の出発地とする説で、もう一つは福岡県の日向(ひなた)とする説です。

古田武彦は、『盗まれた神話』(朝日新聞社、昭和50年)の254頁において“神武東征の発信地の「日向(国)」は宮崎県であり、天孫降臨の「筑紫の日向の・・・」は福岡県だ。”とされていました。復刻版『盗まれた神話』(ミネルヴァ書房、2010年)では204頁となります。そしてその『盗まれた神話』では、「神武と兄とが話し合ったのは、筑前(糸島郡、もしくは博多湾岸)の宮殿においてだった」(朝日259頁、ミネルヴァ208頁)としています。つまり、天孫降臨地は福岡県だが出発地は宮崎県だとされていました。

ところが、その後『神武歌謡は生きかえった』(新泉社、1992年)の28頁において“筑紫の日向(ひなた)の・・・を福岡県糸島郡近辺の「日向」にあてた者は、同時に「神武東行」の出発地もまた、同じく、この「日向(ひなた)」の地に当てねばならなかったのであった。”として考えをあらためています。

最終的には天孫降臨地も神武東行の出発地も糸島の日向とされたわけです。

こうした古田武彦の考えの変更に伴い、古田史学の中でも神武東行の出発地について宮崎と糸島に意見が二分されており、これに伴い『古事記』の天孫降臨説話が九州王朝からの盗用という説もあります。私は盗用説については根拠が希薄なため支持しません。

通説では、神武の出発地については、津田左右吉を中心として九州の南部、宮崎県とされている一方で、糸島を神武東行の出発地とする仮説は、原田大六が提唱していました。したがって、神武東行の出発地については、もともと2説あったわけです。

あらためて、この問題を検討するために、『古事記』の原文を確認します。

『古事記』神武天皇記には、冒頭から次のとおり記され、神武はそもそも東に行くとしています。

神倭伊波禮毘古命與其伊呂兄五瀬命二柱、坐高千穗宮而議云「坐何地者、平聞看天下之政。猶思東行。」即日向發、幸行筑紫。故、到豊國宇沙之時・・・

神倭伊波禮毘古命(かむやまといはれひこのみこと)と其の伊呂兄(いろせ)五瀬命(いつせのみこと)二柱は高千穗宮に坐(ましま)して議(はかり)て云(のたま)い、「何地(いづく)に坐(ましま)せば天下(あまのした)の政(まつりごと)を平(たひら)げ聞看(きこしめ)すや。猶東へ行かむと思(おも)はす。」とのたまひき。即(すなは)ち日向より発(た)ちて、筑紫に幸行(い)でましき。故(かれ)豊國の宇沙に到(いた)りたまひし時、・・・

神武は「猶思東行」として東に行くはずなのに、通説の宮崎出発説では、なぜか宮崎の日向国から北部九州の筑紫へと、北へ向かうこととなります。日向国が出発地では、神武の言葉と行程が全く矛盾しており奇妙だと思ひ、先師・古田が『盗まれた神話』において、宮崎出発説を採用されていたのは納得できませんでした。

ニニギが糸島に天孫降臨し、そこから一足飛びに宮崎県の話になるのは、ストーリーとしてもおかしいです。それならば、「神武東行」の前に、天孫が筑紫から宮崎へ向かう苦労話などがなければなりません。『古事記』にはそのような記述はありません。東行説話の前に宮崎の「日向国」という記述そのものがないのに、なぜ「日向」を宮崎県の「日向国」と解釈するのかの根拠もありません。

一方で糸島は、瓊瓊杵尊のみを祀る天降神社の集中地ですから、私は、宮崎日向説を支持せず、糸島日向説の方が妥当であると考えています。

### 前回の例会の話題

- 馬の古代史 一宮市 畑田寿一
- 天照神話の馬 名古屋市 石田泉城
- 法隆寺の五重塔の心柱 名古屋市 石田泉城

### 例会の予定

- 日時 6月17日(土)13時半～
  - 場所 名古屋市市政資料館
- 来月以降の例会 原則土曜日  
7/15、8/20日、9/16、10/21、11/18、11/18

### 会員の投稿について

- 会報誌への投稿 (編集担当: 石田)  
toukaikodai@yahoo.co.jp
- 投稿締切り日 6月30日(金)

### あいちサマーセミナー

3世紀に卑弥呼は中国に朝貢しました。しかし日本の歴史書には登場しません。現在、卑弥呼が居たとする場所は40か所以上に及びます。卑弥呼はどこに居たのでしょうか。タイトル 教科書が教えない!!! 真実の古代史

日 時 2023年7月16日(日)

3限 13:10～14:30

場 所 名古屋大谷高等学校

地下鉄桜通線 瑞穂区役所下車

4番出口北西へ徒歩4分

講 師 名 畑田寿一、石田泉城 (予定)

